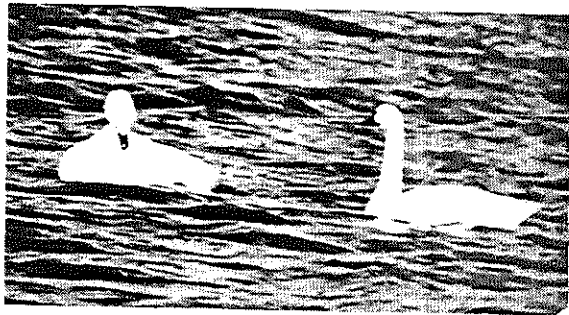


諏訪湖のコハクチョウ(その1)

林 俊 夫

諏訪湖に昭和49年11月飛来したコハクチョウは以後毎年飛来越冬し、今冬で6年連続の飛来である。その面相を調べると、それが同一のペアとその子たちからなる家族群であることがわかる。それが今後どのように変化するか興味深いものがある。記録に欠けた点もあり、学問的には不備があるが、ここに中間報告を行うことにする。



(49年12月8日 カップル)

昭和49年11月11日初めて飛来したのは、成鳥2羽である。この2羽は、今から考えてみると、つがい形成1年目の若いカップルであったと思える。このカップルは、50年4月1日が終認で、完全な越冬を行い渡去した。

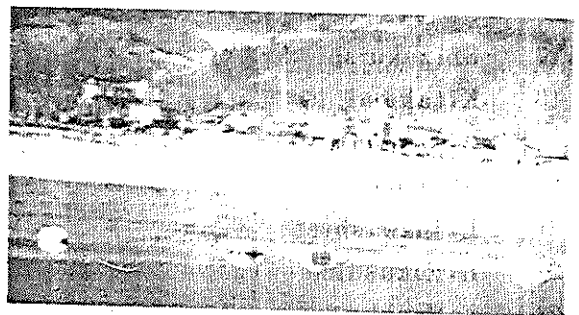


(50年11月22日 よし崎にて)

昭和50年には、前年と同じの11月11日に飛来ししかも、1羽の幼鳥を連れて来た。面相から成鳥2羽は、写真では余りはっきりしないが、前年飛

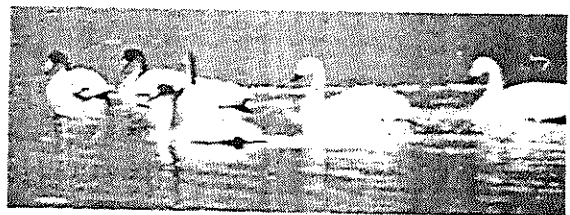
来のカップルに間違いがないことが確認された。この年の終認は3月16日であった。

昭和51年には、11月10日に1羽飛来、これはその翌日姿を消したが、11月26日には4羽飛来、その後一時は5羽になったが、結局4羽が越冬し、3月末頃飛去した。残念ながらこの年は観察が不備で、面相や成鳥幼鳥の別などを確認できる写真もないため、詳しいことは不明であるが、飛来の5羽は何れも成体(成鳥か亜成鳥)であったようである。この中の3羽は、前年飛来の成鳥2羽と幼鳥が成長した亜成鳥ではないかと思われるが、他の2羽については全然見当がつかない。



(52年1月16日 赤砂崎にて)

昭和52年は、例年より遅く、12月14日に7羽飛来した。これは3羽が成体であり4羽は幼鳥であった。その面相と生態から、成体3羽の中の2羽は、最初からの成鳥であり、他の1羽は亜成鳥であると思う。(50年飛来した幼鳥が3年目を迎えたものか、独身雄か。)



(52年12月24日 石舟渡にて)

52年成鳥(1)
正面



(12月24日)
側面



52年幼鳥(3)



52年幼鳥(4)



52年成鳥(2)
正面



(12月24日)
側面



この7羽の中、亜成鳥と思われる1羽と幼鳥1羽が3月12日ころ飛去し、残り5羽は4月1日までいて飛去した。先に飛去した2羽は、既に12月頃からペア的な行動を見せていた。

仲よく
並んだ2羽
(12月24日)



52年亜成鳥

昭和53年には、11月23日に5羽飛来した。これは成体3羽(2羽は最初からの成鳥、1羽は亜成鳥と思われる。)と幼鳥2羽であったが、その後12月19日頃に亜成鳥と思われる成体1羽が加わった。この面相を調べると、亜成鳥と思われる2羽は、前年の幼鳥4羽の中の2羽であるように思われる。

52年幼鳥(1)(12月24日) 幼鳥(2)(12月24日)



(よし崎にて 54年2月11日)

この6羽は、昭和54年3月23日が終認であった。

53年成鳥(1)
正面



(55年2月18日)
側面



53年成鳥(2)
正面



(55年2月18日)
側面



53年亜成鳥(1)
(54年2月28日)
〔52幼(1)〕



53年亜成鳥(2)
(54年2月18日)
〔52幼(3)〕



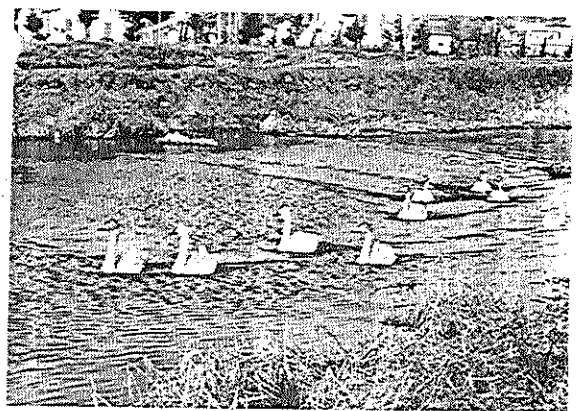
53年幼鳥(1)
(54年2月18日)



53年幼鳥(2)
(54年2月18日)

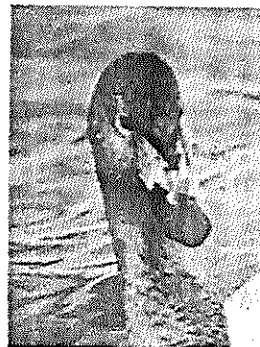


昭和54年11月13日には、10羽が飛来した。3羽が成体であり、その2羽は最初からの成鳥で、他の1羽は明らかに前年も飛来した亜成鳥と思われるものである。残りの7羽は幼鳥である。残念ながら、飛来直後の11月14日には幼鳥1羽が事故死し、1月7日にはまた幼鳥1羽が原因不明の衰弱死して、幼鳥は5羽になってしまったが、これらの幼鳥7羽は一腹のものと考えてよいのではないか。



(55年1月7日横河川河口にて)

54年幼鳥(2)



54年幼鳥(3)



54年幼鳥(4)



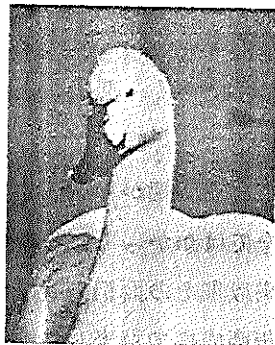
54年幼鳥(5)



54年成鳥(1)
(55年2月4日撮影以下同)



54年成鳥(2)



54年亜成鳥



54年幼鳥(1)



以上がこの6年間の諏訪湖に飛来したコハクチョウの概要であるが、これをまとめると次のようになる。

1. これは、明らかに1つがいの両親による1家族の家族構成の年次変化を示している。

表(1)

年次	49	50	51	52	53	54
成鳥	2	2	?	2	2	2
亜成鳥	0	0	?	1	2	1
幼鳥	0	1	?	4	2	7
計	2	3	5	7	6	10

2. コハクチョウのつがいは一度結ばれると毎年続けられる。
3. 幼鳥の数の変化は、両親の年令による出産能力の盛衰を表わしていて、それは、本年度で最高に達したもののようである。
4. 子鳥は大体1年か2年両親と共に生活し早い

ものは2才目、遅くも3才目で両親から離れて独立するらしい。

5. 幼鳥の面相の変化は複雑であり、途中を詳しく観察しないと、どの鳥がどうなったか判別するのは難しい、しかし3月の面相をしっかりと写しておけば、翌冬亜成鳥で再び渡来した場合、大体判別できると思う。
6. 幼鳥は、事故死病死等が多く、平均寿命はやはり短いようである。

今後の観察の継続により、次のような点が究明できるのではないと思われる。これは一家族の連年渡来という貴重な事例に恵まれて始めてできる観察であるので、大事に行いたいと思う。

1. コハクチョウの繁殖年令や自然可能年令の追求。
2. 家族数の変化。
3. 成鳥の面相による渡りのコースの究明。
4. 初認、終認の期日が毎年割合近いことの追求。
(表2)

年次	49	50	51	52	53	54
初認	11/11	11/11	11/10	12/14	11/23	11/13
終認	4/1	3/16	3/末	4/1	3/23	?

以上推測の多い観察であるが一応中間報告とする次第である。今後観察をより詳細に行い研究を完成させたいと思っている。諸賢の御指導をお願いしたい。特に渡りのコースの究明に御協力をお願いするものである。

追記

この報告には、推測が多く、今後の観察によって結論の違ってくる部分もあると思うが、その後得られた資料によって推測が事実であることの明らかになってきた部分もあるので以下その点を主として追記したい。

5.1年飛来の5羽の中3月まで残った4羽につ

いて、その4羽共に成体であることの明らかな写真が立石秀明氏から提供された。それを見ると、49年以来毎年飛来の成鳥2羽がその中に含まれることが明らかである。しかし亜成鳥については、この写真からは、はっきりしない。52年飛来の亜成長と思われる1羽と同じ面相らしく見えるものがあるが、写真が不鮮明で確定はできない。

この報告で、亜成鳥についての推論が、確たる証拠がなく、乱暴のそしりをまぬがれないかも知れないが、わたしの観察では、亜成鳥と思われるものの行動は、幼鳥と余り変りがなく、成鳥のように常に群全体の安全に留意し、警戒を怠らないような点が、見えないようである。また、53年

の亜成鳥2羽は、前年の幼鳥との面相の相似が相当明らかで、掲載の写真以外の写真も参考にした推定であることを述べておきたい。

とにかく、亜成鳥と思われる鳥についての追求が、より詳細になされなければならないが、首環でなく面相から判別することがどこまで可能かに全てはかかっている。今冬の幼鳥については、飛来以来その面相の追求を行っているので、もし来年亜成鳥で飛来した場合その面相からの推定は、より確かにできると思う。なお、いろいろ反対も考えられるが、諏訪湖の白鳥家族に首環標識を着けて、その行動等を調べることは、意義があると思われる、今後考えてみたい課題である。

諏訪湖のコハクチョウ(その2)

林 俊 夫

I 面相から見た 52年幼鳥と53年亜成鳥の同一性について

昭和52年12月諏訪湖に渡来したコハクチョウは、成体3羽と幼鳥4羽からなる7羽の家族であった。この幼鳥4羽の面相の発達を写真によって追求してみると、図(1)の通りであって、52年幼1号は53年亜成1号と、52年幼3号は53年亜成2号との面相の相似性が認められる。

同一性追求の観点とは、Post nareal area (鼻孔の後の部分)と呼ばれる部分の正面と横面である。正面では初め三日月形に見えるピンクの部分の、その三日月の形の微妙な違いと、そこにくい込んでいる feathering (羽毛をつけている)部分の先端の角度の鋭鈍と横面の初めはピンクで後には黒色に変る部分の縁線の形などである。

今、52年幼1号を調べると、featheringが三日月の中に鋭角に食い込んで三日月を2分している。そして普通この三日月は、だんだん黒色

化して行くのに、この幼鳥の場合は何時まで白っぽく残っている。また横面に現われる線が、途中の凸出した部分の先端がやや鈍である点などが、54年2月の53年亜成1号と相似である。

また、52年幼3号の場合は、一見して明らかな正面より見た黒色化の進行と、横面の縁線の形成から見て、54年2月の53年亜成2号への連続が証明されると思う。

文献

Mary E. Evans (1977) Recognizing individual Bewick's Swans by bill pattern. Wildfowl 28(1977):153-158

II 幼鳥の同一家族性への疑問

先に諏訪湖へ昭和54年11月渡来したコハクチョウ家族の幼鳥5羽(7羽の中2羽死去)を一腹のものとして報告したが、その面相の追求等の結果、5号幼鳥は、あるいは異腹のもの混

入ではないかと疑われるので、その実態を報告する。

別掲、図(2)の面相図において、渡来初期(12月3日)に於ては、5羽間に何等同一家族性を疑う問題点は見えない。ところがこれが発達した2月以降の面相を見ると、他の4羽は、黒色化が、嘴の中央 post nareal area といわれる部分から、上下全体に進行しているのに、5号だけは、上部の黒色化だけが著しく進行し、下部は進行が遅れていて、一見他の4羽との区別がはっきりできるのである。

以上の面相の違いだけで、同一家族性を云々することは無理と思えるが、その行動等を併せて考えると、同一家族性への疑問が一層深まるのである。

別掲写真、図(3)a-cは、ある日の一場面であるが、他の成幼7羽の1群が採餌を止めて、対岸の氷上に憩うのに、5号だけは独り悠々と採餌を続けている。(写真a)。他日に於ても5号はよく群と離れて行動することがある。これは他の幼鳥にはほとんど見られないことである。

次に、やがてそれでも群の休む方へ合流したのであるが、そこで成鳥の1羽に攻撃されて、(写真b)、群から少し離れて休む(写真c)。このほかにも、他の成鳥や幼鳥に攻撃されることが多い。

1月に衰弱死した幼鳥(6号)が、何等かの原因で飛翔ができなくなり、群は漁船を避けて湖の他地区へ飛去したのに、6号は、岸近くの凹部へかくれていて、やがて群が帰って来た時、6号が鳴きながら群の方へ泳ぎ寄ると、両親の成鳥がやはり鳴きながら、勢よく水をけて6号に泳ぎ寄った劇的な涙ぐましい親子の愛情場面を見ているが、5号の場合は、親子の間に濃やかさが見えないように思えるのである。子が危険な場所へ近づいたりする時、親がその子の尾部へ攻撃を加えて安全な方へ追い立てるようなことはよく見るが、

5号の場合、成鳥からの攻撃は、こうした攻撃より強いように見える。

ここで一般的に、幼鳥が他の家族にまぎれ込んで、その群の一員となることは、よくあることなのかどうか知りたいのである。

前回と今回と、諏訪湖に飛来のコハクチョウについての拙い観察と所見を報告したのであるが、白鳥の(特にコハクチョウの)群の構成について先輩諸氏の御教示をお願いしたいものである。

“日本の白鳥”4号に、残留亜成鳥群についての山内昇氏の観察が載っていて興味深く読まさせていただいたが、家族群と亜成鳥群との関係はどうなっているのか、群から離れてつがい形成へはどう発展するのか等、浅学の私には、いろいろ教えていただきたい問題が多い。本田清氏の“白鳥のいる風景”の中の『ある白鳥家族の軌跡』で「子わかれ」の実態について教えていただいたが、「子わかれ」から「つがい形成」へどう発展するかが、実は諏訪湖に来るコハクチョウの家族が、今後どう増減するかの問題に連り、私たちの関心の深い問題である。

私たちは、以前には、諏訪湖に渡来のコハクチョウの子は、次の年には、配偶者を連れて再び渡来し、このようにして年々渡来数を増して行くのではないかと期待したのであるが、これは甘い考えであることが分って来た。現在までの実態は、ただ一家族の幼鳥の数が増して来たに過ぎないのであって、親鳥の年齢が老いるに従って幼鳥の数は今後減って行くのではないかと考えられるのである。

諏訪湖の白鳥の子はどうなるのだろう、どこへ行くのだろうと常に考えているこのごろである。

参考文献

- (1) 本田 清 ある白鳥家族の軌跡「白鳥のいる風景」P. 70 ~ 76
- (2) 山内 昇 日本最北端のハクチョウ類(1977)日本の白鳥第4号P. 36 ~ 38
- (3) 吉川繁男 瓢湖の白鳥たちP. 65 ~ 70 P. 132 ~ 143

図(1)

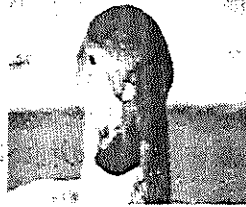
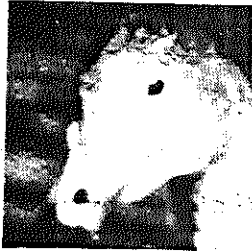
52. 12. 24.

53. 1. 4.

53. 3. 7.

(53 亜成 1)
54. 2. 18.

52. 幼 1

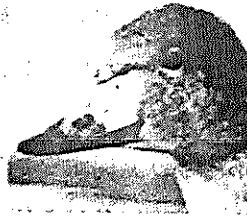
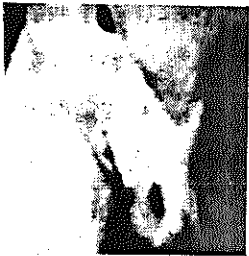


52. 12. 24.

53. 1. 4.

53. 3. 7.

52. 幼 2



52. 12. 24.

53. 1. 4.

53. 3. 6.

(53 亜成 2)
54. 2. 18.

52. 幼 3



52. 12. 24.

53. 1. 4.

53. 3. 7.

52. 幼 4



(写真なし)

图(2)

12 / 3

12 / 30

2 / 4

2 / 27

3 / 18

54.幼 1



54.幼 2



54.幼 3



54.幼 4



54.幼 5

